
天才とテストと召喚獣

シャルロッテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才とテストと召喚獣

【Nコード】

N1641V

【作者名】

シャルロット

【あらすじ】

天才とバカは紙一重。そんな言葉の代名詞ともいえる天才少女・吉井沙耶華。彼女はバカの集まりでもあるFクラスで何を学び、何を手に入れるのか？・・・なんて気取ってみただけの吉井明久成り代わり（転生ではない）小説。バカで天才な主人公が原作フラグを折っていく！？

主人公設定！

これは、バカとテストと召喚獣の二次創作小説となります。

ネタ（短編）の連載verです。

短編を見ていない人の為に、設定を書いておきます。

これも原作とは一切関係ありません。

また、召喚獣の容姿・武器の関連で別作品の要素も少し出てきます。

・・・OK？

ではどうぞ。

主人公設定

名前：吉井 沙耶華さやか

年齢：16歳（もうすぐ17歳）

性別：男装した女

身長：159cm

容姿：青と紺の中間のショートカット（後頭部に水色のリボン着用）。

Bカップ（サラシ着用）で肌は白め。どちらかというと可愛い系。

とても庇護欲をそえられる容姿。

これはあくまで男装していない時のものであり、男装時は原

作の明久とほぼ同じ。

性格：天才のはずなのに何故かバカ。

でも仲間思い、そして時々それがエスカレート。

結構ストレートな物言いをする（つまり正直すぎる）。

要はサバサバしている。

備考：男装については学園も了承している。

知っているのは雄二・姫路・美波・翔子・優子・教師陣。

よって姫路と美波は言い寄ったりしない。

逆ハ一体質だが、本人は超が三つ付くぐらいの鈍感。

頭はチートな位良いが、普段は頭が悪いふりをしているため
Fクラスに。

苦手科目はなし。

一年の頃に色々やらかした所為か、観察処分者に。

実は女子四人の中でひっそりと「吉井沙耶華親衛隊」が結成
されている。

そして沙耶華に言い寄る男子を裏で密かに排除しているとか・
。。。

ちなみに隊長は美波、副隊長は翔子。

召還獣：武器は剣で、F a t e の 約束された勝利の剣 エクスカリバー。

衣装は魔法少女まどか マギカ的美樹さやか（魔法少女）
の衣装が紺色っぽくなった感じ。

とにかく強い。

ただしフィードバックはある。

バカテスト 第一問【化学】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いられるべき金属合金の例を一つ上げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

吉井沙耶華の答え

『問題点・・・家が消えて無くなる点。』

合金の例・・・ステンレス（ジュラルミンは水分に弱い為適さない）』

教師のコメント

確かに正解ですが、家が消えるというのは初めて聞きました。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

進級！（前書き）

「シャッシャッシャッ」

進級！

あたしがこの文月学園に入学してから二度目の春。校舎へと向かう道には満開の桜。

そんないかにも春の風物詩、という風景。

でもその風景に目を奪われるのはほんの一瞬のこと。その満開の桜並木の間を。

あたしは今、全速力で駆け抜けていた。

「吉井、遅刻だぞ」

玄関の前で聞き覚えのある声に呼び止められる。

顔を上げると、浅黒い肌の短髪教師。

「あ、西村せん——じゃなくて鉄人。おはようございます」

頭を下げて挨拶。

彼は生活指導と補習担当の教師です。

「言い直す必要性を感じないのだが・・・」

溜息をついている先生は無視。
じゃないとやってけないから↑

ちなみに鉄人というのは生徒間での西村先生の渾名。
由来は趣味のトライアスロンらしい・・・どうでもいいけれど。
ちなみにその後、遅刻の件でこつてり搾られた。
仕方ないじゃないか、理由があつたんだから。

「ほら、受け取れ」

先生が封筒をあたしに封筒を手渡す。

この封筒の中にはクラス分けの結果が入っている。

説明しておくね。

あたしの通う文月学園では、頭の良し悪しによってクラスが分けられる。

AからFまであるんだけど、Aなら頭が良くて、Fなら馬鹿。
つまり所属クラスで頭が良いか悪いかが一発で分かる。

Fクラスは馬鹿の、Aクラスは天才の代名詞、ってくらいにね。
ちなみにあたしは・・・馬鹿ならぬバカ。

勉強は出来るんだけどね・・・アハハ。

「それにしても、どうして手を抜いたんだ？お前だったらAクラスの代表にだって余裕でなれたろうに」

こう先生にいわせるくらい。

封筒の中身を見ると、あたしはFクラスだった。

どうしてかというと。

あたしはFの方が好きなのだ。

あんな勉強しか頭に無い人達よりも、馬鹿ばかりのFクラスの方が面白い。

だから学校では馬鹿のふりをし、なおかつ男装して「吉井明久」と名乗っている。

前に知り合いに用意周到過ぎると言われたが、何が悪い。

あたしは高校生活を楽しみたいんだ。

文句は言わせない。

言った奴はフルボッコの刑だ。

あたしはFクラスに向かって歩き出す。

こうしてあたしの最低クラス生活が幕を開けた。

バカテスト 第二問【国語】

問 以下の問いに答えなさい。

- 『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』
『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1)弘法も筆の誤り』
『(2)泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱めに祟り目』などがありますね。

吉井沙耶華の答え

- 『(1)河童の川流れ(そしてそのまま窒息死すればいいのに)』
『(2)泣きつ面に蜂(むしろ目潰し希望)』

教師のコメント

正解です。括弧の中身は見なかったことにしておきます。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

坂本雄二の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

バカが集まり、Fクラス

「・・・何、コレ」

いきなり第一声がこれでごめんなさい。

やつほーやつほー、吉井沙耶華だよ。

去年はほぼ全くとっていいほどに訪れることのなかった三階。

ちなみに、一階が職員室&各実習室、二階が一年、三階が二年（つまりあたし達）、四階が三年って感じになってるんだよ。

その三階に足を踏み入れると、まず最初に普通の五倍程の大きさをもつ教室。

多分ここがAクラスかな。

少し気になったので、覗いてみることにした。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこのAクラスの担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

自己紹介したのは、髪をお団子状にまとめ、眼鏡をかけた女の人。スーツをすっかり着こなし、知的女性の代表のような教師だ。

彼女が名乗ると、壁一面を覆うほどの大型プラズマディスプレイに名前が表示される。

・・・庶民には縁がなさそうです。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？」

・・・ええー。

個人にエアコンってどうなの。

そもそも各自で設定しても同じ室内だから意味くない？

しかも周りは高級ホテルみたいな内装だし。

常識の範疇を越えてるよね、これ。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給します。他にも何か必要なものがあれば遠慮な
どすることなく何でも申し出てください」

あ、紅茶の匂い。

しかも滅茶苦茶高級な奴だよ、流石Aクラス。

こんなのまで準備されてるんだ。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て
ください」

「・・・はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは・・・あれ、霧島さんじゃん。

さすがだね、学年トップだなんて。

ああ、一つ豆知識。

クラス代表っていうのは、そのクラスで一番頭が良かった人になる
の。

だから学年最高成績のAクラスでクラス代表ってことは学年で一番
頭が良いことになるんだ。

「・・・霧島翔子です。よろしくお願いします」

視線の中心にいても、淡々と自己紹介する霧島さん。

彼女はクラスの女性陣に目を向けていた。

こんな行動から同性愛者という予想をされることが多いけれど、彼

女にはきちんと片思いの相手がいる。

坂本雄二。

まあ馬鹿の一人だけど、小学校の頃は神童なんて呼ばれていた。
あ、やば。

あたしも教室に行かないと。

正直に言おう。

この教室のドアを開ける勇気はない。

ドアが閉まっけていてもカビ臭さが漂ってくる・・・！
でもまあ、仕方ない。

勇気を出せ自分、ここで逃げたらおしまいだ！！

あたしは自分にそう言い聞かせると、ドアを勢い良く開けた。

「早く座れ、このウジ虫野郎。」

ふざけるな。

誰がウジ虫だコンチキショー（キャラ崩壊）！

そう思って教卓——声がした方——に目を向ける。

するとそこに立っていたのは教師ではなく。
あたしの悪友、坂本雄二そのものだった。

「・・・雄二、何やってんの？」

あたしの疑問は最もだ。

普通、生徒が教壇に上がるなんて有り得ない。

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？何で？」

「一応このクラスの最高責任者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表？」

「ああ、そうだ」

雄二がにやりと口角を吊り上げる。

つまり雄二を説得すれば、このクラスを動かせるってことか。

あたしは、知らないうちに顔が綻んでいた。

バカの集まり、Fクラス（後書き）

シャ「うわ駄文・・・。

お目汚しすいませんでした」

自己紹介！

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

そういつてふんぞり返る雄二。

そしてその視線の先には、床に座るクラスメイト。

・・・そう、床。

この教室には椅子がない。

Aクラスとは大違いだ、流石Fクラス。

何て感心している場合じゃない。

このクラスは色々とヤバイ。

本来机があるべきところには卓袱台、椅子の代わりに座布団。

おまけに床は腐った畳ときた。

これじゃ勉強する気も出ない。

むしろ逆効果だ。

そんなことを思いながら教室中を見回していると、背後から声がした。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

振り向くと、そこにはいかにも冴えない風体のオジサン。

寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを着て、貧相な体をしている。まるで鉄人の対義語になれそうな感じだ。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

ホームルーム

あ、この人教師なんだ。

しかもこのクラスの担任なんだね。

とりあえず返事をして、空いている席につく。

ちなみに席は自由です。

そしてあたし達が席につくと、先生がゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

そういうと、黒板にチョークで名前を書こうとし――やめた。

うわ、チョークすらともに用意されてないよこのクラス。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい」

なんて斬新な設備。

噂には聞いていたけれど、流石にここまでとは。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

クラスメイトの誰かが、先生に設備の不備を申し出る。

いや、きっとそれは全員だよ君。

「あー、はい。我慢してください」

ほらやっぱりね。

これでもう全員悟っただろ・・・。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」
「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」
「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

・・・いたよ！

いたよ、未だに諦めない勇者^{バカ}が！

ここまでくると尊敬するよ馬鹿諸君！！

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからともなく、黴臭い独特の空気が。

きつと床に敷き詰められた腐った畳の臭いだ。

せめてEクラスにしておくべきだっただろうか。

ほんの少し後悔した。

自己紹介！ その2（前書き）

主人公設定！に若干訂正を加えました。

特に主人公の秘密を知っている人物については大幅に変更しました。
念の為、確かめておいて下さい。

自己紹介！ その2

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

先生の指名を受け、生徒の一人が立ち上がる。
誰かと思って見てみれば……なんだ、知り合いか。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀吉は、去年のクラスメイト。
独特の言葉遣いが特徴的な、中性的な容姿をした男子だ。
そして、演劇部のホープでもあるらしい……知らないけど。

「——と、いう訳じゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

そう言って自己紹介を締めくくる秀吉。
可愛い、と思ったのは秘密だ（仮にも男装してるんだ、異端審問会に殺される）。

「……………土屋康太」

いつの間にか次の自己紹介。
どうやら今度も知り合いのようだ。
相変わらず口数が少ない彼は、秀吉と同じく去年のクラスメイト。
目立つとやりにくいんだろう、イロイロと。
あまり陰が濃いいえない。

それにしても。

このクラス、男子が多すぎないか？

正直言うとむさ苦しいぞこのクラス。

学力最低クラスともなると、やっぱり女子は少ないみたいだね。

「——です。外国育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

お、また次の人だ。

今度は珍しく女子みたいだ。

良かったなFFF団の男子共。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は——」

……何だろう、嫌な予感が。

というか、この自己紹介の内容、当てはまる知り合いが一人だけいるんだけど……。

「趣味は、吉井明久に言い寄る人間を拷問することです」

やっぱりか。

恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つこの女子。

間違いなく……！

「はろはろー」

笑顔で手を振ってくる彼女。

「……あう。し、島田さん」

「さ……じゃなかった、吉井。今年もよろしくね」

去年のクラスメイトでもあり、いつの間にか結成されていた“吉井沙耶華親衛隊”の隊長・島田美波。

何故こんなにも知り合いが多いFクラス。

ババアの陰謀か、陰謀なのか？

……泣きたくなってきた。

「——です。よろしく」

前の人の自己紹介が終わる。

ああ、次はあたしの番か。

「吉井明久です、よろしくお願いします。ああ、それと」

ここで一つ忠告を。

これから平穏に暮らす為にも必要なことを言っておかなくては。

「僕に暴力振るった奴。良くて三分の四殺し、悪くて死ぬと思え。以上」

……沈黙が痛い。

ヤバイ、やり過ぎたか。

そう思って内心慌てていると——次の瞬間、一気に騒がしくなった。

『何アイツ女っぽくね？』

『いやいや、正真正銘男の娘だろ』

『秀吉と同じタイプじゃん』

『ツンデレ最高！』

『僕っ娘萌え』

泣いて良いだろうか。

男の娘ってなんだ、あたしは秀吉じゃないのに。

見た目だって普通に不細工な男じゃないか。

ふと視線を感じると、雄二と秀吉、美波と康太から同情の視線が。同情するなら助けてくれ、といたくなつた。

自己紹介！ その2（後書き）

…カオス。

こんなつもりじゃ無かったのに。

学年次席とFクラス（前書き）

大分オリジナルになっています。

だって主人公がFクラスになったのは、姫路を助けたからではなく手を抜いたからですし。

だから、必然的に知らないことになるわけです。

学年次席とFクラス

しばらくダウンしてました。

うう、これ流石に精神面^{メンタル}へのダメージが半端じゃない。

畜生、あとで雄二に八つ当たり死^してやる……！

何が良いかな、とりあえず硫化水素が蔓延している密室に閉じ込めて……。

そんなことを考えていたら、突然ドアが音を立てて開いた。遅刻した人がいたのかな？

そう思って、ドアを見る。

桃色の髪、ウサギの髪飾り。

そして、悔しいことにあたしより大きい胸。

そう——姫路瑞希だった。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

初めてFクラスの心が一つになった瞬間だ。

まあ驚くのも無理はないけれど。

何があっただろう？

クラスが騒然とする中、先生は平然とした顔で姫路さんに話しかけた。

「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

そういつて縮こまった姫路さん。

男だったら多分惚れているだろう、うん。
でも、皆はそれで驚いたんじゃないと思う。

「はいっ、質問です！」

「あ、は、はいっ！なんですか？」

男子の一人が手を挙げる。

そして言ったのは、場合によってはとても失礼な言葉。

「なんでここにいるんですか？」

多分これは、Fクラス全員が思っていることだ。

姫路瑞希といえば、学年次席として有名だ。

とてもじゃないけど、Fクラスみたいなバカの集まりに居るべきじゃない。

「そ、その……。振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

ああ、成る程。

試験中の途中退席は無得点と見做される。

無得点だとしたら、自動的にFクラスに配属される。

そうでもなければ姫路瑞希程の人物がこのクラスにいる訳がない。

そして、そんな姫路さんの言葉を聞いて、Fクラス内での言い訳の声。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』

……これは、想像以上にバカだらけだ。
流石にこれはないだろう、これは。

お前らもう少し現実味のある言い訳をしろ。
そして一番目、それはお前が馬鹿なだけだ。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そう言っただけで雄二の隣の卓袱台に着く姫路さん。
くそう、やっぱり間近で見るとあたしとは天と地の差だ。

「き、緊張しましたあゝ……」

安堵の声を上げる姫路さん。

……自己紹介は、緊張するほどのものではないと思うよ？
まあ、いつか。
別にどうでもいいし。

「おい、姫路」

そんな思考をしていたら、雄二が姫路さんに話しかけた。
ああそっか、一応クラス代表だもんねアンタ。
ごめん、ぶっちゃけあたしの方が頭良いから忘れてた。

「は、はいっ。何ですか？えーっと……」

慌てて雄二の方へ振り向く姫路さん。

椅子じゃなくて座布団だから、若干動きがきこちない。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願いします」

姫路さん、純粹だなあ。

一応言っておくけれど、雄二は純粹にクラスメイトとしてよろしく頼むといった訳ではない。

春休みに聞いたが、何でも試験召喚戦争でAクラスに挑むらしい。

だから、“戦力として”よろしく頼むということなのだろう。

でもまあ、自分には関係ないし、それでどうこうなる訳でもないから放っておこう。

そうして、あたし達Fクラスの波乱万丈な自己紹介は終わった。

学年次席とFクラス（後書き）

……いい加減自分の駄文具合に絶望してくる今日この頃。

あれおつかしいなー、こんなに更新が遅れるつもりじゃなかったのになあー？

…まいつか。

突然ですがお知らせです

唐突にすみません。

連載を読んで下さった方、更新を待つて下さっていた方。すみませんが、この連載はしばらく凍結することにします。

理由は、管理人のリアルが大分忙しくなってきたからです。

ただでさえ普段で手一杯なのに、中間テストが近付いてきて、英検等の準備もしなくてはなくなりしました。

あとは、単純に他の連載ばかり作っていてこの連載については何も書かなくなった、というのもあります。

そんなこんなで、無期限凍結とします。

ぶっちゃけ、更新再開するの？という気もしますが、それはそれ、これはこれです。

長々とすみませんでした。

それでは、また別の連載でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641v/>

天才とテストと召喚獣

2011年10月9日11時52分発行